

ACCU news

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

特集 ACCUのNew Normal

ユネスコスクールのオンライン交流／日本とモンゴル 新しい経験と未来への絆……2

日韓教職員オンライン対話プログラム／
韓国教職員招へいプログラム サブプログラム：
アウトリーチ拡大のためのオンライン交流……8

インド教職員招へいプログラム……9

タイ教職員招へいプログラム……9

「中国教職員招へいプログラム」に係る
事前勉強会（講義）……10

教育の新しい評価について考えるフォーラム
[SDGs達成のための担い手育成推進事業]
……10

活動メモ……11

ACCU INFORMATION……11

No. **412**
2021年2月号



ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

ACCUの New Normal



「どの場所に住む人にも事業を届ける」という私たちの目標が、新型コロナウイルスの感染拡大によって困難に直面する一方、実現への新たな方法・視点を模索するきっかけにもなっています。ユネスコスクール事業、モンゴルとの交流を例に、これまでの振り返りと成果、今後の課題を考えていきます。

Japan ユネスコスクールのオンライン交流

これまでの「交流」の形と課題

日本には、2019年11月時点で、ユネスコスクールに加盟している学校が1120校あります。日本国内では、ユネスコスクールがESD^{*1}の活動推進拠点として位置づけられ、現在では世界の加盟校数の約1割を占めており、世界第1位の加盟校数を誇っています。

ユネスコスクールは、国際的なネットワークの一員として、ユネスコの理念の

実現を達成することを目的に、平和、国際理解及び持続可能な開発に貢献する活動が求められています。しかし、日本のユネスコスクールは、国際交流に関してはあまり活発ではありません。2019年度ユネスコスクール年次活動調査の結果によると、ユネスコスクール間わず国内の学校と交流した学校は、全体の51%、海外の学校と交流した学校は、全体の27%でした。交流方法としては、生徒・教員の往来、協働プロジェクト、手紙や

Eメール等があり、それらを通して交流を深めています。子どもたち同士の友情の芽生えや国際的な視野の広がり、異文化理解等、交流による成果は大いにあるものの、ICT環境の整備、言葉の壁、交流の継続性が課題となっています。このような課題を考慮しながら、ACCUはユネスコスクール事務局として、交流を促進するために国内外とのユネスコスクール同士のマッチング支援を行ってきま



オンライン意見交換会の様子と発表者資料



オンライン交流実現まで

2020年に入り、新型コロナウイルスの影響により、益々海外との往来が難しくなりました。特に、研修旅行や修学旅行等による対面での交流を重視してきた学校にとっては、従来のような国際交流は難しくなり、交流の中止・延期や、例年とは異なる交流方法を模索することとなりました。

日本のユネスコスクールは、自地域で活動を発展させてきた学校が多く、「海外との交流はハードルが高い」という声や、「交流＝準備に時間がかかって教員の負担感が…」という声もあります。そこで、まずは国内の交流から始めることで、交流のハードルを下げていくことが重要ではないかと考えました。加えて、学校は今、コロナ禍における外出自粛、学校の臨時休校、校内での感染対策等、今まで経験したことのない持続困難な状況に直面しています。このような中で、ユネスコスクール同士が国内のネットワークを活用してつながり、意見交換しながら互いに協力し合える場を設定できればと思い、「ユネスコスクールオンライン意見交換会」を開催することとなりました。この意見交換会では、オンラインを活用し、より柔軟で自由な形態を用いて実施することで、参加者であるユネスコスクールの教員の方々が気軽に参加できる場にしたいと考えています。ま

た、教員個人の興味関心に応じて気軽に参加できるよう、まずは、ユネスコスクールの先生のニーズを探るべく、アンケートを実施しました。その結果から、関心が高かったテーマを取り上げて、毎月1回程度実施しています。

オンライン交流で、下記「参加者の声」のようにポジティブな側面があった一方、課題も見えてきました。一つは、オンライン活用で国内のユネスコスクール交流のハードルが下がったように見えて、依然として学校現場は忙しく、オンラインでも参加時間が無いと判断されてしまう

こと。二つ目は、ICT環境の整備具合により接続が不安定で交流が途切れることがあること。最後に、海外の学校と未交流のユネスコスクールには、どの国・学校とつながればよいか、言語や精神的ハードル等乗り越えるべき壁の高さがあります。

これらは、ACCUの国際交流事業でも共通の課題です。次の章では昨年度からつながるモンゴルとの交流事業が今年度どのようにして行われたか触れていきます。

ユネスコスクールオンライン意見交換会

第1回 コロナ禍における持続可能な社会・持続可能な学校とは(その1) 8月2日実施

事例紹介：神奈川県ユネスコスクール連絡協議会 望月浩明氏

コメント：玉川大学教育学部 小林 亮氏

第2回 コロナ禍における持続可能な社会・持続可能な学校とは(その2) 9月29日実施

事例紹介：横浜市立日枝小学校 住田昌治氏

コメント：広島市立大学 国際学部 卜部匡司氏

第3回 災害時におけるユネスコスクールのつながり 10月13日実施

事例紹介：大牟田市立みなと小学校 下地 徹氏

コメント：奈良教育大学 中澤静男氏

第4回 ユネスコスクールの高校生とコロナ禍の学習について語ろう！ 11月24日実施

事例紹介：名古屋国際中学校・高等学校 石川愛子氏、伊藤衣音氏、大島梨紗子氏、鬼頭美優和氏

コメント：静岡大学教育学部 田宮 縁氏

第5回 持続可能な未来の担い手を育むための探究学習 12月22日実施

事例紹介：奈良県立国際高等学校 松本真紀氏

コメント：尚絅学院大学 見上一幸氏

第6回 模擬授業「鬼滅の刃がおもしろいわけ」から学ぶファシリテーションスキル 1月26日実施

模擬授業：大分大学教育学研究科教職開発専攻(教職大学院) 河野晋也氏

※各回レポートはユネスコスクール公式ウェブサイト(<http://www.unesco-school.mext.go.jp/>)にて公開中!

参加者の声

各回テーマは異なるものの、“コロナ禍ならではの”といった以下の共通意見が出ました。
なお、参加者同士で連絡先交換が行われるなど、本会がそれぞれをつなげるきっかけにもなりました。

1 オンライン交流の可能性を実感

オンライン活用で全国のユネスコスクールの先生と気軽につながることができ、海外の学校とも簡単に交流できるとわかった。

2 持続可能性・ESDの重要性を再認識

現在の持続不可能な状況下だからこそ「持続可能性とは何か」を深く掘り下げ、ポストコロナにおける新たな学びの場の創出について考え、ESDを身近に感じるきっかけになった。

3 平常時もコロナ禍も

「つながり」が重要
平常時のつながり・ネットワークを大切に育んできたことで助け合いにつながった。また、ASPU^{※2}UnivNetや外部団体の知見活用の重要性も知り、コロナ克服に向け世界のユネスコスクール間でも助け合い・学び合いができるとよい。

4 子ども・教員の変容(特に主体性)

各自がより協力し合い柔軟に対応し、主体性が見られるようになった。子どもたちはデジタルに詳しく、オンライン活用後は教員と共に活動をするようになった。能動的に動き、できることから挑戦し皆が楽しみながら活動を継続・発展させていくことが大切だと気づけた。

*1 ESD Education for Sustainable Development 持続可能な開発のための教育

*2 ASPU^{※2}UnivNet ユネスコスクール支援大学間ネットワーク

日本とモンゴル Mongolia 新しい経験と未来への絆

新モンゴル日馬富士学園

ご縁をつなぐ——新モンゴル日馬富士学園との友情の輪

新モンゴル日馬富士学園は、元横綱・日馬富士関（以下、日馬富士さん）が2018年にモンゴルの首都ウランバートルに設立した学校です。現在は初等部・中等部・高等部を合わせて1493名の生徒と165名の教職員が学校生活を送っています。同学園の日本語を学ぶコースでは、校外研修として一週間の訪日計画され、2019年6月24日（月）から29日（土）にかけて高校1年生4名と数学科教員1名が初来日しました。本研修は日馬富士さんとACCU理事長の共通のお知り合いを通してご縁がつながり、ACCUがコーディネートすることになりました。初日は駐日モンゴル大使館へ表敬訪問し、アルタイ・エンヘアマガラン参事官にモンゴルと日本の関係や日本の見所等のお話を伺い、本研修への激励をいただきました。翌日には東京都内の教育機関を訪問しました。渋谷教育学園渋谷高等学校では、英語のディベートの授業に参加し、日本の高校生活を体感しました。同校は海外進学を目指す高校生の多い学校でもあり、日本の大学進学を目指すモンゴルの生徒たちにとって目標を同じにする同

世代との出会いとなりました。また、慶応義塾大学に通う大学生との交流では、キャンパスを見学しながら大学生活について聞き、さらに目標が明確になったようでした。生徒たちは初めての日本に目を輝かせ、日本の高校生や大学生との交流を楽しみました。

2019年10月にはACCUスタッフ3名が同学園を訪問する機会に恵まれ、訪日研修に参加した生徒たちや先生と再会しました。生徒たちの案内で文化祭の準備でにぎわう校内を見学していると、あちこちで生徒たちが「こんにちは」と日本語で挨拶をしてくれ、真新しい校舎で明るく学校生活を送っている様子を知ることができました。続いて高等部の校長とも面会し、カリキュラムについて説明を受けました。その中で、訪日研修の意義や今後も相互の交流を深めたい意向を共有することができました。

翌年2020年10月17日（土）、オンラインで東京とモンゴルをつなぎ、2回目の高校生同士の交流が実現しました。参加者は書類選考によって選ばれたモンゴル模擬国連大会（MUM：Model



オンラインでのランチ交流会にて（2020年10月）

UNESCO Mongolia) に出場する日本各地の高校生7名と、日馬富士学園の高校生8名です。本交流はモンゴルへの渡航が叶わなかった生徒たちに何とか“生”の交流の機会を増やせないかと考え、本番数日前に急遽決定し、実施しました。リモートではありましたが、画面越しに初対面した生徒たちはランチタイムを共に過ごし、アニメやJ-POP等共通の話題であったという間に距離を縮め、最後には再び交流会を行うことを約束し合いました。日本語を学ぶ生徒たちと日本語を使って国際交流することは、日本の生徒たちにとっても新鮮な体験となり、プログラムでの学びを深めることにつながりました。2019年に来日した生徒たちも、2021年に高校卒業を控え、日本の大学に進学するという目標に向かって着実に前に進んでいました。

ご縁をつないできた日馬富士学園との交流ですが、今後も両国の多様な青少年との交流の機会を創出し、友情の輪を広げ深めていけるよう努めてまいります。

ウランバートル市内の新モンゴル日馬富士学園校舎（2019年10月）



日馬富士学園との交流

新モンゴル日馬富士学園 創立

MUM

2018

ACCUでは2019年から新モンゴル日馬富士学園との交流やモンゴル模擬国連大会への参加等を通して様々な形でモンゴルとの青少年交流を実施しています。開始から間もない本交流ですが、新型コロナウイルスが大流行した2020年は「オンライン」を取り入れ、着実に交流を深めています。人と人との出会いをつなぎ広げてきたモンゴルとの交流、これからも相互理解と友情を育てていきます。

モンゴル国

大相撲力士出身国としても身近なモンゴルは、人口約329万人、1kmあたりの人口密度が低く面積は日本の約4倍あります。6～15歳までが義務教育(5・4・3制※)、以降、大学・専門大学等があり、高校卒業生の約8割が大学に進学し、女性率が高いのも特徴です。(参考：外務省、文部科学省HP)

※初等教育5年間、前期中等教育4年間、後期中等教育3年間



Model UNESCO Mongolia (MUM)---1

参加のきっかけも人との出会いから

2019年11月16日(土)から17日(日)に開催した「第13回全日本高校模擬国連大会」において、モンゴルユネスコ国内委員会(モンゴル外務省)でプログラムスペシャリストとしてご活躍の、ナムーン・ガンバット氏を、視察のために東京都内の会場にお招きしました。ナムーン氏は、大学を卒業されて以降、モンゴルユネスコ国内委員会に在籍されており、モンゴルにおけるユネスコ関連事業の政策策定、ユネスコスクールの取りまとめ、活動推進、広報等、また、モンゴルでの模擬国連活動の推進に取り組んでおられます。

ナムーン氏の本大会へのご招待は、ACCUのスタッフが、2019年7月2日(火)、3日(水)にベトナム・ハノイで開催されたユネスコの国際会議「UNESCO 2019 Forum on ESD and GCED (ユネスコ2019持続可能な開発のための教育<ESD>及び地球市民教育<GCED>フォーラム)」に出席した際にお会いしたことがきっかけとなりました。お互いの活動について話す中で、日本のユネスコスクールの活動と高校模擬国連事業に関心を持っていただき、お互いに協働で

きることの模索を約束しました。その後、モンゴルユネスコ国内委員会主催の東アジア会議で再会したこと等を経て、今回の視察へとつながりました。

16日(土)、本大会に出場する生徒の引率で参加していた日本の教職員へのサイドイベントとして、モンゴルで実施されている全国規模のユース(15～27歳)を対象としたMUMの概要を、ナムーン氏よりご紹介いただきました。MUMは、2015年から毎年行われており、2020年で第6回目を迎えています。日本では、国連総会を模して、参加した生徒たちが各国の国連大使になりきって行う会議が多いですが、MUMではユネスコ総会を模した会議が行われ、参加者たちは各国のユネスコ大使として議論に参加します。こうした活動を通して、参加者の地球規模課題、国際情勢、国ごとの政策や持続可能な開発目標(SDGs)等に関する知識の向上や、リーダーシップ、批判的思考、スピーチ、多文化な環境での合意形成など参加者のスキルの育成を目的としているところは、日本と共通しています。

また、日本とモンゴル、どちらにおいても、模擬国連活動が都市部では盛んな



ナムーン・ガンバット氏

一方で、地方では知名度が低く、なかなか参加の機会がもてないことが共通した特徴であること、また、多様な地域から多様な背景を持つ参加者の議論の場であることを担保し、議論を高めることへの課題が共有されました。

発表を聞いた日本の先生方からは、「モンゴルでこんなにすばらしい活動が行われていることを知らなかった」、「モンゴルのイメージが変わった」といった声や、「大会のルールや評価基準についてもっと詳しく知りたい」、「日本の高校生がMUMに参加するチャンスはあるのか」といった声が多く寄せられました。日本の先生方の高いご関心や海外の大会参加へのニーズを再確認し、翌年(2020年)のプログラム開始に向けて、さらに連携を強めるきっかけとなりました。

2019
6月24日～29日
日馬富士学園の
生徒と教員が来日

OFF

10月
ACCUがモンゴル訪問

OFF

11月
モンゴルユネスコ国内委員会
ナムーン氏来日

OFF

2020
10月 オンライン交流

ON

10月 オリエンテーション

ON

10月30日～31日
MUM

ON

2019

2020

日本とモンゴルの交流手段：オフラインはOFF、オンラインはONを記載

オン・オフハイブリッドのディスカッション



「モンゴル模擬国連への参加をとおして共に学ぶ アジア太平洋青少年相互理解推進プログラム」は、先述の流れを受け、今年度実現しました。新型コロナウイルスの影響で開催は2か月延期となり、モンゴルへの渡航を中止しリモート参加になりましたが、日本の高校生が海外の模擬国連に参加する新たな方法、機会を創出できた大きな一歩にもなりました。

10月3日(土)、書類選考で選ばれた高校生7名が1都1道5県から東京に集合し、MUMへの参加に先駆け英語での自己紹介やディスカッションを行い、興味のあることや将来の夢等を共有しまし

た。また、オンラインでナムーン氏とMUM運営メンバーからモンゴルの歴史や文化について聞き、モンゴルへの理解を深めました。高校生たちはすぐに打ち解け、プログラムへ向かうエネルギーを共有しました。

同月17日(土)、再び東京とモンゴルをオンラインでつなぎMUMのオリエンテーションを行いました。日本の高校生たちが議題や会議の進め方等の説明を受けた後、当日ペアを組むモンゴルのユースの参加者が発表され、この日から本格的な会議準備が始まりました。

高校生たちは24日(土)までの7日間、メッセージアプリ等で連絡を取り合いNational Statement(担当国としての意見をまとめた提言文)を作成しました。これは会議準備だけでなく、互いのことを知り、友情を深める機会にもなりました。

今回のMUMではユネスコの5つの活動分野のうち3つの委員会に分かれて各議題を議論しました。



Pick up

日本でも独自に模擬国連を開催!

11月14日(土)、15日(日)に、第14回全日本高校模擬国連大会をオンライン開催しました。JAXAのはやぶさ2が小惑星リュウグウの砂を採取し地球に持ち帰ったことや、米国の民間宇宙船によって野口聡一さんが国際宇宙ステーションに到達されたこと等は記憶に新しいと思いますが、大会の議題はまさに「宇宙利用」でした。高校生たちが真剣に議論しあった二日間であったのは言うまでもありません。



教育(ED)委員会

持続可能な開発のための教育
*におけるICT利用及びODLの
主流化

担当：アラブ首長国連邦



文化(CLT)委員会

アーティストや創造産業の
レジリエンスへの支援

担当：アメリカ合衆国、
モンゴル国、スイス連邦



模擬国連議論

ユネスコの5つの活動分野から
3つの委員会

人文社会科学(SHS)委員会

特にジェンダー視点による
差別や排除への対処

担当：南アフリカ共和国、
コロンビア共和国、
フィリピン共和国



モンゴル模擬国連——そしてこれからの交流

10月30日（金）、ついにMUMが初日を迎えました。

日本の高校生たちは、それぞれ自宅や所属先の高校からオンラインでウランバートルのMUM会場とつながりました。オープニングセレモニーでは、ACCUの国際教育交流部の部長による挨拶動画が流れ、新型コロナウイルスの感染が拡大する中、関係者の皆様のご協力により本会議に参加できたことへの感謝を述べるとともに、交流の新しい形を模索するこ

との意義等が述べられました。その後、日本の高校生たちは、オンライン上に設置された各グループテーマである教育・人文社会科学・文化の議場に分かれ、ウランバートルの会場においてオフライン参加しているモンゴルのペアの参加者と協力しながら会議に臨みました。各会議は、事前に作成した提言文に沿って進められました。提言文は、ペア同士で初めての模擬国連であったり、模擬国連における先輩・後輩だったりする中、共に学び、励まし合いながらそれぞれ完成させました。これを基に、ユネスコ総会さながら、それぞれのテーマについて真剣な話し合いが行われました。

2日目の31日（土）は前日の議論を踏まえ、例えば教育の部屋ではICTの活用についてさらに深く話し合うなど、部屋ごとに白熱した議論が繰り広げられました。この2日間を通してオンライン・画面越しという状況でも共に考え、意見を交わすことは可能だということを実感しました。

クロージングセレモニーでは、遠く離れた日本各地から参加した高校生7名の



健闘を、舞台上で司会者が称える場面もありました。閉会式ではUNレジデントコーディネータのタパン・ミシュラ氏、モンゴルユネスコ国内委員会事務総長のウヤンガ・スクバートル氏等から会全体への講評がありました。

本プログラム全体を終えた参加者からは、地球規模課題の解決に向けてより一層学びを深めていくという決意とともに、模擬国連の面白さに改めて気づいたというコメントや、日本の高校生同士・モンゴルの参加者と今後も交流を重ねていきたいという思いが語られました。

※この事業は東芝国際交流財団様からのご支援により行われました。



見えてきた課題、そして今後の発展へ

今年、初導入となった“オンラインによる交流”。そこには、メリットもデメリットもあります。例えば…

メリット

- 首都圏在住でなくても国際的なプログラムに気軽に参加できること
- 物理的に集合せずとも生徒同士のネットワークが構築できること

デメリット

- ネット環境に依存するため、音声以外の心理的情報等を得ることが難しい
- 相手の意図を理解するために対面以上に時間を要する

しかし、オンラインツールは今、世界的ニーズの高まりとともに発展し続けています。メリット・デメリットを可視化し、またその良さを最大限に活用しながら、人と人とのつなが

りや温もりを参加者に感じてもらうにはどうしたらよいか？ ACCUは模索し続けてまいります。

日韓教職員オンライン対話プログラム／

韓国教職員招へいプログラム サブプログラム：アウトリーチ拡大のためのオンライン交流

「今できること」×「新たなチャレンジ」を目指す、SDGs達成に資するオンライン交流プログラム

国際教育交流部 高松 彩乃

パンデミックの中で国際交流事業を行うことになったこの一年、プログラムの企画・運営においてはこれまで以上にSDGsの基本理念「誰一人取り残さない」を強く意識してきました。

日韓間の教職員国際交流事業は、韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)が実施する日本教職員の韓国派遣プログラムと、日本側で実施する韓国教職員招へいプログラムで構成されます。

今年度は10月中旬の4日間、韓国派遣プログラムの代替事業として「日韓教職員オンライン対話プログラム」が実施されました。これまでは日本教職員が1週間程度韓国の教育現場を訪れていましたが、分散登校等の状況を踏まえ「教職員同士の意見交換」に的を絞り、日韓合わせて6～8名程度のグループで、平日夜間に1時間×2回の意見交換を行いました。対面交流とは異なるコミュニケーション方法や時間制限等の課題はありましたが、既存の「連続する1週間のプログラム」という条件では参加が難しい方にとっては、参加のハードルが低く



様々なツールを活用して、伝え方や見せ方を工夫する

なったという側面もあります。あるグループではお子さんを寝かしつけながら参加された先生もいらっしゃいました。退席時間もありましたが、交流事業の新たな可能性を感じました。

一方、韓国教職員招へいプログラムでは、オンライン学校訪問や交流会等、様々なプログラムを準備する傍ら今後の事業のアウトリーチを広げていくため少人数のプロジェクトを立ち上げました。島しょ部や山間部等の小規模校に勤務する日韓教職員6名とエキスパート2名で全3回のオンライン会議を通して活動や課題の共有、意見交換を行っています。地域社会や他校との連携のあり方、地域でESDが浸透しておらず孤軍奮闘している…など、参加者同士が共感しあえるトピックが多いことから、率直で忌憚ない議論と学び合いが行われています。地域も年齢も経験値も異なる先生方の連帯には希望があります。パンデミックの影響はまだ長く続きそうですが、今後も日韓の事業運営機関で連携し、より多くの方が参加し、学び合えるプログラムを実施していきます。

日韓教職員オンライン対話プログラム アンケート抜粋

教育現場における COVID-19の影響に関して

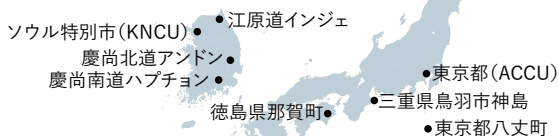
韓国の先生の生の声が聞けて、現場の混乱は一緒であること、その上で生徒にとってよりよい活動を模索していることを知り、韓国の現状に理解を深めたとともに親しみを持ち、共に乗り越えていく仲間なのだという意識が持てた。

オンライン交流に関して

移動が無いので時間が確保しやすい。例：遠隔地にいたり、半日部活動の指導があっても参加可能

交流時間が短く、交流が細切れ（形式的）な感じが否めない。

アウトリーチプログラムの参加者所属校の所在地



DATA

日韓教職員オンライン対話プログラム
実施期間：10月11日(日)～17日(土)
のうち4日間
参加者：日韓教職員約40名
開催場所：オンライン

DATA

韓国教職員招へいプログラム サブプログラム：
アウトリーチ拡大のためのオンライン交流
実施期間：10月25日(日)、12月13日(日)、1月24日(日)
参加者：日韓教職員6名、専門家2名
開催場所：オンライン

インド教職員招へいプログラム

バーチャル時代の相互理解と連携を深めることの重要性

国際教育交流部 天満 実嘉

11月2日(月)～29日(日)にかけて、「インド教職員招へいプログラム」をオンライン実施し、インド全土から16名の教職員が参加しました。インド各地と日本の交流ポイントをオンラインでつなぎ、約1か月の間に交流セッションを複数回行い、教職員としての互いの経験を共有し、理解を深めていきました。バーチャルでありながら、中央行政の方針を学んだ上で現場を視察し体系的に学べる従来のプログラムの良さを踏襲し、文部科学省によるビデオ講

義、バーチャルビジットとして映像を使った学校訪問・地域探訪、北杜市立甲陵高等学校での教職員意見交換会と生徒との交流会、公募により集まった日本全国の教職員が参加する日印教育交流会をプログラムに盛り込み、いつも以上に教職員同士の語らいの時間に重点を置いた交流を行いました。最終日の閉会式ではインド教職員の代表から、この困難な時を共に乗り越えるために、互いの経験を共有し、相互理解と連携を深めることの重要性が語られました。



DATA

実施期間：11月2日(月)～29日(日)のうち5日間

参加者：インド19名(運営、オブザーバーを含む)、日本教職員29名、高校生240名
開催場所：オンライン

タイ教職員招へいプログラム

オンライン国際交流での気づき

国際教育交流部 岡野 晃一

タイ教育省の支援を得て、11月27日(金)に名古屋経済大学市邨高等学校とDebsirinromklao校、12月8日(火)に山形県立山形東高等学校とSuksanareewittaya校との学校間1:1交流をオンライン実施しました。タイの2校は共に生徒3,000名前後、バンコク近郊にあり日本語を含む語学教育が盛んな高校です。市邨高校と山形東高校ではタイの教職員と生徒に一目で学校の特長を掴んでもらえるよう工夫を凝らした学校紹介動画を作成しました。動画視聴後の生徒間交流や教職員懇談会では多くのやり取りがあり、新たな気

づき生まれ相互理解を深めることができました。僅か3時間の交流でしたが「世界中でこのような活動を行うことが、きっと平和につながっていくのだろう」という生徒や、「普段国際交流に携わらない他の教職員も参加できたことにより、国際理解推進の意義を学校内に幅広く伝えることができた」という教職員、何より「今後も継続して生徒も教職員も交流を続けていきたい」という声とともに連絡を取り始めるといった動きが見られました。これからの両校の動きには目が離せません。



市邨高校とDebsirinromklao校



山形東高校とSuksanareewittaya校

DATA

開催日：11月27日(金)、12月8日(火)

参加者：タイ教職員15名、日タイ高校生約100名
開催場所：オンライン

「中国教職員招へいプログラム」に係る事前勉強会（講義）

中国の教育事情とICT化

国際教育交流部 伊藤 妙恵



オンライン勉強会の集合写真（大館市教育委員会にて）

インターネットを通じ、長距離移動しなくても遠隔地にいる人とつながれることのありがたさを感じた今年度、中国教職員向けの映像制作等に協力してくださった大館市教育委員会と同市の先生方を対象に、中国について学ぶオンライン勉強会を10月7日（水）に実施しました。

文部科学省と大館市をオンラインで結び、文部科学省総合教育政策局調査企画課 外国調査第二係の係長・新井 聡氏に、毎年実施している日本教職員中国派遣プログラムの出発前オリエンテーションと同様、中国

の教育事情についてご講義いただきました。

中国民謡「茉莉花」や中国語会話練習からはじまり、中国の教育施策の概況に加え、最新状況として、学校のICT化が進んでいること、ネットワークやプラットフォームの構築、中国教育科学研究コンピューターネットワーク（CERNET）、DingTalk・Zoom等のソフトウェアを提供する民間企業の貢献が大きいことなどをお話いただきました。コロナ禍における学びを止めないための布石はすでにあり、ダイナミッ

クに整備が進んでいることも明らかになりました。

なお、参加者からは「中国の教育は社会主義国ゆえに本質（目的）から日本と違うことが初めてわかった」「普段聞くことのできない内容なので新鮮な気持ちで講義を受けられた」等の感想を頂きました。

DATA

開催日：10月7日（水）
参加者：大館市教職員12名
開催場所：オンライン

教育の新しい評価について考えるフォーラム [SDGs 達成のための担い手育成推進事業]

「変容」を捉え、促す評価について考える

教育協力部 篠田 真穂

11月14日（土）に「教育における新しい評価について考えるフォーラム—持続可能な未来に向けて—」をオンラインで開催しました。今年度より学校教育における持続可能な未来の創り手を育むための「評価」について検討する事業がスタートし、本フォーラムでは学校教育に留まらず「評価」という共通のキーワードの下、分野の垣根を超え、既存の枠に捉われない新しい評価の在り方について検討することを目的に実施しました。学校教育や社会教育、個人の成長を支えるコーチングに関わる

有識者をお招きし、評価について考える機会を得たことで「評価とは何か」という本質的な問いに立ち返ることができました。個人—集団の変容の捉え方や、日常会話によって相手を変容させ「評価」している可能性についてなど、これまで意識することのなかった視点で評価を捉え直すことができました。2月下旬に本フォーラムも含む事業成果をまとめた冊子が発行される予定です！皆さんにとって持続可能な未来のための「評価」とはどのようなものですか？



DATA

実施期間：11月14日（土）
参加者：98名
開催場所：オンライン

高校模擬国連第14回日本代表团 最終発表会

①6月21日(日)②JCGC、ACCU③オンライン④日本(視聴約400名、発表16名)、モンゴル(視聴5名)

ASPUnivNet第1回運営委員会

①7月10日(金)②ACCU③オンライン④10名

和歌山県立橋本高等学校、古佐田丘中学校 出前授業

①7月10日(金)②和歌山県立橋本高等学校、古佐田丘中学校③和歌山県立橋本高等学校、古佐田丘中学校体育館④高等学校 約400名、中学校 約120名

ASPUnivNet第1回連絡会議

①7月31日(金)②ACCU③オンライン④43名

第1回共同研究会
[SDGs 達成のための担い手育成推進事業]

①8月1日(土)②ACCU③オンライン④31名

第2回共同研究会
[SDGs 達成のための担い手育成推進事業]

①8月22日(土)②ACCU③オンライン④31名

第1回ユネスコスクール意見交換会

①8月25日(火)②ACCU③オンライン④9名

SMILE2019 事業報告会

①9月3日(木)②ACCU、凸版印刷株式会社③オンライン④8名

第2回ユネスコスクール意見交換会

①9月29日(火)②ACCU③オンライン④9名

モンゴル模擬国連への参加をとおして共に学ぶ
アジア太平洋相互理解促進プログラム

①10月3日(土)、17日(土)、30日(金)、31日(土)②ACCU、モンゴルユネスコ国内委員会③出版クラブビル、オンライン④日本の高校生7名、モンゴル53名(日馬富士学園8名、模擬国連参加者45名)

第3回共同研究会
[SDGs 達成のための担い手育成推進事業]

①[分科会1]10月4日(日)、[分科会2]10月11日(日)②ACCU③オンライン④[分科会1]18名、[分科会2]11名

「中国教職員招へいプログラム」に係る
事前勉強会(講義)

①10月7日(水)②文部科学省、ACCU、大館市教育委員会③オンライン④大館市教職員12名

日韓教職員オンライン対話プログラム

①10月11日(日)～17日(土)のうち4日間②韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)、文部科学省、ACCU③オンライン④日韓教職員約40名

第3回ユネスコスクール意見交換会

①10月13日(火)②ACCU③オンライン④15名

ユネスコスクール年次活動調査
ワーキンググループ会合

①10月17日(土)②ACCU③オンライン④7名

ASPUnivNet第2回運営委員会

①10月20日(火)②ACCU③オンライン④10名

第4回共同研究会
[SDGs 達成のための担い手育成推進事業]

①[分科会1]10月25日(日)、[分科会2]10月31日(土)②ACCU③オンライン④[分科会1]18名、[分科会2]11名

韓国教職員招へいプログラム サブプログラム:
アウトリーチ拡大のためのオンライン交流

①10月25日(日)、12月13日(日)、1月24日(日)②文部科学省、ACCU、KNCU③オンライン④日韓教職員6名、専門家2名

インド教職員招へいプログラム

①11月2日(月)～29日(日)のうち5日間②文部科学省、ACCU、インド教育省、インド環境教育センター③オンライン④インド19名(運営、オブザーバーを含む)、日本教職員29名、高校生240名

中国教職員招へいプログラム

①11月2日(月)～12月9日(水)②文部科学省、ACCU、中国教育部③オンライン、メール④中国教職員25名

タイ教職員招へいプログラム

①11月12日(木)、27日(金)、12月8日(火)②文部科学省、ACCU、タイ教育省③オンライン④タイ教職員15名、日タイ高校生約100名

教育の新しい評価について考えるフォーラム
[SDGs 達成のための担い手育成推進事業]

①11月14日(土)②ACCU③オンライン④98名

第14回全日本高校模擬国連大会

①11月14日(土)～15日(日)②ACCU、JCGC③オンライン④日本の高校生106名(53校)

第5回共同研究会
[SDGs 達成のための担い手育成推進事業]

①11月15日(日)②ACCU③オンライン④31名

第4回ユネスコスクール意見交換会

①11月24日(火)②ACCU③オンライン④37名

中国とのオンラインによる教職員交流

①11月27日(金)②中国教育部、中華人民共和國駐日本国大使館、文部科学省、ACCU③オンライン④日中教職員8名

令和2年度ユネスコスクール中四国ブロック大会

①11月28日(土)②岡山大学、ACCU③オンライン④51名

国内/国外ワーキンググループ会合
[持続可能な地域づくりを推進する
学びの共同体構築支援事業]

①[国外]12月3日(木)、[国内]12月22日(火)②ACCU③オンライン④国外7名、国内6名

第12回ユネスコスクール全国大会/
ESD 研究大会 第5分科会

①12月6日(日)②ACCU③オンライン④約80名

ASPUnivNet第2回連絡会議

①12月15日(火)②ACCU③オンライン④43名

東京家政学院中学校・高等学校講演

①12月16日(水)②東京家政学院中学校・高等学校③東京家政学院中学校・高等学校④生徒77名、教員4名

第5回ユネスコスクール意見交換会

①12月22日(火)②ACCU③オンライン④8名

韓国教職員招へいプログラム
(日韓教職員交流20周年記念)

①1月23日(土)、26日(火)、29日(金)、31日(日)、2月2日(火)、7日(日)②文部科学省、ACCU、KNCU③オンライン④韓国教職員46名、日本教職員16名

第6回ユネスコスクール意見交換会

①1月26日(火)②ACCU、環境省・日中韓環境教育ネットワーク(TEEN)③オンライン④15名(見込み)

ACCU INFORMATION

ACCU50周年記念基金



1971年の設立以来ユネスコをはじめとする国際機関・各国政府・教育関係機関・産業界・地域社会と協働し平和で持続可能な社会の実現を目指して事業を進めてきました。今日まで多くの皆様にご理解とご協力、温かいご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

節目の年を迎え、このたび「ACCU50周年記念基金」を開設し、広くご寄附の御協力を仰ぎたく存じます。頂きましたご支援はACCUの今後の事業推進のため大切に活用させていただきます。

50周年記念基金 三井住友銀行(支店/東京公務部) 口座番号:(普)3021322
お振込先 口座名義: コアエザイザン約済ユネスコアジアセンター